

特別講演 2

「GERD の診断と治療

－F スケール開発の経緯と使用意義について－」

群馬大学医学部附属病院 光学医療診療部 助教授

草野 元康 先生

胃食道逆流症 (Gastroesophageal reflux disease : GERD) は胃酸などが食道内へ逆流することにより引き起こされるさまざまな疾患、および症状の総称である。すなわち、GERD は食道に明らかな逆流性食道炎を有する症例のみならず、明らかな内視鏡所見がないにも関わらず、酸逆流に由来する胸やけなどの症状を訴える内視鏡陰性 GERD の両者を含めた広い疾病概念として定着してきた。従って日常診療下での GERD 存在診断は、病歴を含めた的確な問診や診断を目的とした問診票などの使用に始まり、それに引き続く上部消化管内視鏡検査が施行されるのが通常である。

一般的に疾患の治療効果はその主症状の消退の有無で行われるが、これまで GERD 治療の有効性を正確かつ客観的に評価できる問診票は利用可能なものがなかった。内視鏡による再評価もよく行われるが、初回検査により食道炎以外の器質的疾患が既に除外されている場合には、食道粘膜の評価のためのみに内視鏡で再検査を行う意義は多くない。

我々は GERD の日常診療において簡便で、しかも薬物療法による症状の治療効果も判定できる問診票を考案することを目指し、FSSG 問診票 (Frequency Scale for the Symptoms of GERD 通称 : F スケール) を開発した。この「F スケール」は薬物治療における内視鏡改善度と非常によく相関し、また維持療法における内視鏡的な再発・再燃とも相関することが見出された。F スケールは GERD の治療効果の判定、フォローアップに対し、患者の自覚症状の客観的な評価に役立つ新しい問診票である。

今回の講演では、日本における逆流性食道炎の特徴とその診断を中心に治療戦略まで最新的话题を提供し、また F スケールの開発の経緯と特徴を概説し、GERD に対する自覚症状からの新しいアプローチを提案する。